

●授業基本情報

科目名／Course Title	平和を考えるA／Lecture about peace with some viewpoint A		
担当教員／Instructor	藤石 貴代, 松井 克浩, 橋本 博文		
対象学年／Eligible grade	1, 2, 3, 4, 5, 6	開講番号／Registration Code	230G3235
講義室／Classroom	総合教育研究棟 F-375	開講学期／Semester・Term	2023年度／Academic Year 第1,2ターム／the first and second term
曜日・時限／Class Period	水/Wed 3限	単位数／Credits	2
授業形態／Class Format	講義	科目区分／Category	新潟大学個性化科目 自由主題／Niigata University Original Subjects Other Themes
副専攻／Minor	副専攻「外国語（コア）」	定員／Capacity	50
分野／Academic Field	75：新潟大学個性化科目	水準／Academic Standard	03：全学学生受入可・大学基礎水準
抽選方式／Selection Method	手動		
実務経験を有する教員が実施する科目／Conducted by instructor with work experience related to the field?	○	遠隔授業の実施形態／Remote Class Style	同時双方向型授業/Interactive

●授業概要情報

更新日／Updated on	2023/02/12
対象学部等／Eligible Faculty	全学部
聴講指定等／Designated Students	特になし
科目の概要／Course Outline	<p>戦争は、人が人として人らしく暮らすこと（生活）も、生きること（人間性）も徹底的に破壊します。戦争は自然災害のように「起きる」ものではなく、誰かが何らかの目的のために「起こす」ものです。国家が「国民」や「国益」を守るといふなら、武力増強（競争）のための武器購入や軍事研究に、日本に居住・滞在する人私たちすべて（外国籍住民・旅行者も）が払う税金（東日本大震災被害の「復興特別所得税」含め）を注ぎ込むのではなく、戦争を起こさ（せ）ない努力こそ、最善の方策です。</p> <p>戦争を起こすことを権力者に許してしまえば、私たち一般の住民の多数の命が奪われ、国土も廃墟になることが、現在のウクライナとロシアの戦争の状況からも明らかです。武器（防衛装備品）を購入しても「抑止力」になり得ません。</p> <p>ヨハン・ガルトウング（1930-）によって、「平和」とは暴力のない状態であり、戦争のような「直接的暴力」のみならず、不公正・不公平な社会構造による</p>

貧困、飢餓、差別、抑圧、疎外といった「構造的暴力」のない状態が「積極的平和（positive peace）」であると定義されています。したがって、「敵基地攻撃」（先制攻撃）を可能とする日本政府の「積極的平和主義（proactive contribution to peace）」は、ガルトウングの「積極的平和」とまったく似て非なるものです。

2015年9月19日未明、いわゆる「安全保障関連法案」（自衛隊法、周辺事態法、武力攻撃事態法、PKO協力法など）が法律ごとに個別に採決されることなく、まとめて参議院で可決されました。これにより、日本と「密接な関係にある外国に対して武力攻撃」があった場合に（日本が攻撃を受けていなくとも）、自衛隊の海外での武力行使が可能になりました（憲法解釈変更による集団的自衛権の行使容認）。既に2004年の自衛隊イラク派遣時に日本人1名が殺害されました。「非戦闘地域」に派遣されたはずの自衛官が「テロの脅威」にさらされた結果、派遣中・帰国後に20名以上が自殺しています。（「インタビュー イラク派遣のストレス 元自衛隊中央病院精神科部長・福間詳さん」『朝日新聞』2015年7月17日17面 「PKO、伏せられた被害 南スーダン、陸自内部文書」『朝日新聞』2015年9月2日27面）2015年1月には日本人2名が殺害されました。日本政府の「対テロ戦争」追従、「敵基地攻撃（反撃）」のための軍備増強は、むしろ国内外で日本国民・住民を戦争の危険にさらすものです。

地震と原発がひしめく狭い日本で、「戦争できる国づくり」のために、たとえば「武器輸出」が「防衛装備移転」と言い換えられ、産官学共同の軍事研究が、核（原子力）開発と同様、国策として進められています。しかし、新潟大学では、「軍事への寄与を目的とする研究は、行わない。」と声明しています（「新潟大学の科学者行動規範・科学者の行動指針」）。日本国民はかつて、広島と長崎に原爆を落とされるまで（1945年だけで死者20万人以上、戦後77年が経つ現在も、原爆の後遺症に苦しむ人たちが国内外にいます）戦争をやめることができませんでした。また、戦死者の多くは、無謀な作戦でアジア・太平洋地域に置き去りにされた餓死者や病死者でした。現代日本に生きる私たちが特攻隊の若者の死に同情・感動するならば、同時に、大勢の未来ある若者たちを死なせるような戦争を起こし、そのような作戦を遂行した指導者の責任を問わなくてはなりません。私たち一人ひとりが「お上におまかせ民主主義」のままでは、国民を存亡の危機に陥れる国家運営が再び繰り返されるでしょう。2023年の今日、そのような事態が既に始まっているかも知れません。

国民生活の「安心」「安全」が損なわれているのは、「テロの脅威」「核抑止力」によるものばかりではありません。非正規雇用の増大が所得と教育の格差による貧困の連鎖を生み、福島第1原子力発電所の放射能漏れ事故もまったく収束していません。汚染水（処理水）の海洋投棄の結果は、熊本県水俣市や新潟県阿賀野川流域での「水俣病」被害の原因を想起させます。現代日本社会に生きる私たちはもはや、国内外で起きる諸問題について「知らない」「分からない」と目を背け、「考えない」で生きていける時代ではなくなりました。人の生命・生活に悲惨な影響を及ぼす戦争も公害も、自然災害ではなく「人災」です。それにより、近代日本が国内外にどれだけの死傷者をもたらしただのか、その犠牲の上に現代日本社会があり、今でも人々に犠牲を強い続けている現実が存在します。まさに「歴史は繰り返す」のです。

日本の学校教育で「広島・長崎の原爆投下」について教えることは、「反米教育」でしょうか？今は大勢の観光客で賑わう「長岡花火」に「慰霊」「復興」

「平和への祈り」が込められていること、それが1945年8月1日の長岡空襲（空爆）で亡くなった千人以上の市民への追悼に由来することも、「反米感情」でしょうか。決してそうではありません。日本が起こした戦争と植民地支配により、他国（地域）の領土と人命を奪った過程と結果をしっかりと学ぶ「記憶の義務」を今からでも果たさなければなりません。そうでなければ、故ヴァイツゼッカー大統領の「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目になる」（1984.5.8）という言葉のとおり、日本国民は、戦争や植民地支配（植民地主義）において人間がどれだけ残酷に、非人間的になれるか、他国（地域）民を人間扱いせず、残虐な行為を犯すことができるかを、心に刻むことも反省することもなく、また同じ過ちを繰り返すことでしょう。（既に「外国人労働者」に対して、日本国の公務員がそのような過ちを犯しています）

ユネスコ世界遺産に登録された「長崎県端島（いわゆる軍艦島）」、日本政府による推薦が決まった「佐渡金山」での「戦時労働動員」も、劣悪な労働環境における元祖外国人労働者問題であると同時に、日本人労働者の問題でもあります。つまり、隣国との「歴史認識問題」ではなく、普遍的な、労働者の「人権」の問題です。

老若男女、健常者も障がい者も、いかなる経済的階層に属する人であっても、人が人として人らしく生きられる「持続可能な社会」を築くことが、これからの「平和」の実現と言えるでしょう。新潟には世界最大級の「柏崎刈羽原子力発電所」も「新潟水俣病」も「拉致」も「佐渡金山」問題もあるからこそ、新潟からアジア（日本）と世界の問題を考えてみます。

科目のねらい
／Course Objectives

「平和学を学ぶのに特別な準備はいらない。予備知識もとくに要求されない。共感に基づいた他者への関心—おそらくこれがいちばん必要なことだ（中略-引用者）社会の現実に目をひらく。先入観や偏見を洗いなおす。お互いの関係性をとらえる。関心をもちつづけ、顔の見える交流をかさねる。問題の背景や構造の把握を試みる。こうしたコミットメント（自己投入）をとおし、手応えのある世界理解を自分のものとして獲得する。グローバルゼーションや開発主義を相対化する批判的視点をもつ」（「はしがき」『新・平和学の現在』法律文化社、2009年、i頁）ことを、この授業でも目指します。

学習の到達目標
／Specific Learning Objectives

戦後77年間の日本国内の平和と繁栄は、大日本帝国が国策として引き起こした戦争により傷つき、亡くなった他国民（民族）・自国民の膨大な犠牲の上に成立していることを知ること。現代を生きる私たちには、戦争や公害の筆舌に尽くしがたい悲惨な実態を学び、同じ過ちを二度と繰り返さないために「記憶の義務」があることを理解し、実践すること。平和について広く深く自主的に学習する動機づけを得ること。講義で得た知識や考えを自分なりにまとめ、他者に対して発表・説明できるようになること。

登録のための条件(注意)
／Prerequisites

平和とは何か、そしてその実現について、真剣に真摯に考える姿勢を持っていること。新潟大学課題別副専攻「平和学」履修者を除き、「平和を考えるB」「平和を考える in 新潟」のいずれかを既に聴講済の学生は、重複して受講できません。

授業実施形態について
／Class Format

オンライン（ビデオ会議システム）と対面授業を併用する予定ですが、新型コロナウイルス感染状況に応じて判断します。
各講師の講義内容は、現代日本社会の様々な側面からの問題提起です。テレビやインターネットに流れる「情報」のように「他人事」として通り過ぎず、「もし自分（や自分にとって大切な人）がそうだったら」と常に自分の身に置き換えて

	想像しながら聞き、考えてみるのが大切です。毎日の生活で気になるニュースについては、新聞も（できれば2紙以上）読んでください。
成績評価の方法と基準 ／Grading Criteria	すべての講師の授業に出席し、全体で2/3以上の出席が必須条件。期末レポートを課す。期末レポート（50%）と、出席・ミニレポート・討論参加等の平素の学習態度（50%）で評価する。
使用テキスト ／Textbooks	各授業担当教員がPDF資料等を配布します。
関連リンク ／Related Links	http://www.fureaikan.net/information/details.php?id=330 （新潟県立環境と人間のふれあい館～新潟水俣病資料館～） https://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/kyousei/heiwa-shisetsu.html （平和記念公園展示館：直江津捕虜収容所跡地） https://www.city.nagaoka.niigata.jp/kurashi/cate12/sensai/siryoukan.html （長岡戦災資料館） http://www.nchm.jp/ （新潟市歴史博物館みなとぴあ） http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp/evidence/ （沖縄平和祈念資料館） http://www.hpmmuseum.jp/ （広島平和記念資料館） https://wam-peace.org/ （アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」wam） https://www.unic.or.jp/news_press/info_materials/booklets_leaflets/ （国連広報センター） https://www.yasukuni.or.jp/history/ （靖国神社） https://mugonkan.jp/galleries/ （戦没画学生慰霊美術館「無言館」） http://sjpm.hansen-dis.jp/ （群馬県草津町栗生楽泉園重監房資料館） https://www.unesco.or.jp/teacher/ （公益社団法人日本ユネスコ協会連盟）
参考文献 ／References	東海林吉郎ほか編『足尾鉍毒亡国の惨状』伝統と現代社、1977年 ヴァイツゼッカー（永井清彦訳）『荒れ野の40年：ヴァイツゼッカー大統領演説全文』（岩波ブックレット）岩波書店、1986年（新版、2009年） 岡本達明・松崎次夫編『聞書水俣民衆史 全5巻』草風館、1989～1990年 岡本三夫ほか編『新・平和学の現在』法律文化社、2009年 坂東克彦『新潟水俣病の三十年—ある弁護士の回想』日本放送出版協会、2000年 松井克浩『震災・復興の社会学：2つの「中越」から「東日本」へ』リベルタ出版、2011年 同上『故郷喪失と再生への時間：新潟県への原発避難と支援の社会学』東信堂、2017年 同上『原発避難と再生への模索：「自分ごと」として考える』東信堂、2021年 赤井純治『地球を見つめる「平和学」—「石の科学」から見えるもの』新日本出版社、2014年 宇井純『公害に第三者はない』（宇井純セレクション2）新泉社、2014年 木村真三『「放射能汚染地図」の今』講談社、2014年 宮坂道夫『ハンセン病 重監房の記録』（集英社新書）集英社、2006年 裾雄二・姜信子『死ぬふりだけでやめとけや』みすず書房、2014年 内藤千珠子『愛国的無関心』新曜社、2015年 佐藤真『日常と不在を見つめて』里山社、2016年 佐々木寛『市民政治の育てかた：新潟が吹かせたデモクラシーの風』大月書店、2017年

	<p>関礼子ゼミナール編『阿賀の記憶、阿賀からの語り：語り部たちの新潟水俣病』新泉社、2016年</p> <p>渡邊登『「核」と対峙する地域社会：巻町から柏崎刈羽、そして韓国へ』リベルタ出版、2017年</p> <p>同上『再生可能エネルギーによる持続可能なコミュニティへの市民の挑戦：「おらってにいがた市民エネルギー協議会」の活動をめぐって（新潟大学大学院現代社会文化研究科ブックレット）』新潟日報事業社、2022年</p> <p>永野三智『みな、やっとの思いで坂をのぼる：水俣病患者相談のいま』ころから、2018年</p> <p>ジェニファー・エバーハート（山岡希美訳）『無意識のバイアス——人はなぜ人種差別をするのか』明石書店、2021年</p> <p>キム・ジヘ（尹怡景訳）『差別はたいてい悪意のない人がする』大月書店、2021年</p> <p>安藤聡彦ほか編著『公害スタディーズ：悶え、哀しみ、闘い、語りつぐ』ころから、2021年</p> <p>ほか、各授業担当教員が適宜紹介する。</p>
<p>キーワード /Keywords</p>	<p>★（実務経験を有するゲストスピーカー）</p>
<p>備考 /Notes</p>	<p>聴講については、第1回授業時に聴講希望理由を提出し、これをもとに抽選により許可する。ただし、特別な事由（何度も抽選漏れした、聴講希望理由に見られる熱意など）により若干数の追加を考慮する。聴講希望者は必ず第1回目の授業に出席すること。</p> <p>【授業実施形態】 対面＋非対面（オンラインビデオ会議システム） 対面時の教室およびオンラインのパスワード等は授業時に指示する。</p>

● 授業計画詳細情報

<p>内容 /Content</p>	<p>授業時間外の学修 /Out-of-Class Study</p>	<p>備考 /Notes</p>
<p>（以下は予定です。初回授業であらためてスケジュールをお伝えします）</p> <p>第1ターム 第1回：ガイダンスと問題提起 第2回：「平和」を死語にしない（1） 第3回：広島・長崎、被爆の実相と地学的視点 第4回：原発事故を体験してNo Nukes 地球の実現、広島での被爆体験 第5回：「平和」を死語にしない（2） 第6回：新潟水俣病は終わっていない 第7回：映画「阿賀に生きる」（監督：佐藤真1992） 第8回：映画「阿賀に生きる」（続）</p> <p>第2ターム 第9回：災害社会学から平和を考える 第10回：3.11後を生きる私たち 第11回：グループ討論（1） 第12回：戦争遺物の語る平和と戦争（1） 第13回：同上（2） 第14回：同上（3）</p>	<p>人は「事実よりも好みの情報」（『日本経済新聞』2017年1月26日（木）9面）に偏りやすく、SNSがその傾向に拍車をかけているという。「事実」は多面的であることを常に意識しながら、「情報」を比較し、真偽を判断する「疑いの目」を持つよう心がけてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「聴講理由」をよく考えておく ・「東日本大震災10周年」「水俣病公式確認（熊本1956年新潟1965年）」に関わる新聞記事を附属図書館データベース（『朝日新聞』『新潟日報』）および各新聞社電子版などで検索して読んでおく ・「関連リンク」のサイトを閲覧する 	

第15回：グループ討論（2）

第16回：（予備日）